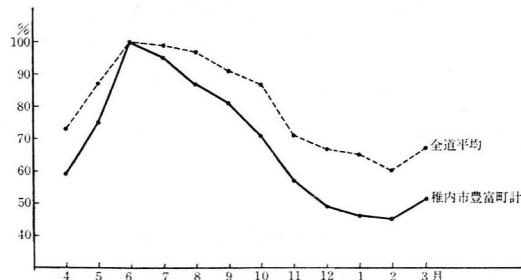




産乳量季節差の改善に役立つ。

月別生産乳量の状態は、分娩後の泌乳推移と給与飼料その他の生理的要因及び環境要因によって変化する。この実態を示したのが第1表である。即ち、10月～11月の急激な乳量の落ち込みは春先に分娩期が集中するため、大半が泌乳後期となる生理的要因もあるが、放牧草地の生産量の低下から乾物摂取量不足等からくる環境要因によるところが最近大きく目につくようになった。しかも、環境要因による乳量の低下は、乳牛の持参能力を著しく低下させると同時に、受胎率の低下、泌乳期間の短縮等経営に与える影響は極めて大きく、この期間の徹底した飼養管理が望まれる。

第1表 最高乳量月に対する比率 (48.4～49.3)



## 紫カブの特性

短期多収の多汁飼料で冬季に欠乏し易い水とビタミンの給源となり、特に「秋落ち時の飼料」としての活用に適する。

根部は球形で半分位地上部に出て紫色を呈しているが、地下部は白色でち密、茎葉は比較的少なく、積雪寒冷地向きの品種である。

- 特 性 ① 塩基性飼料である。  
 ② 消化率がよい。(併給飼料も)  
 ③ 粗纖維合量が少ない。(0.8%)  
 ④ 可溶性炭水化物が多い。

## 飼 養 効 果

○ 飼料摂取量が多くなる。喰い込みがよくなる。紫カブ1日20kg給与で乾物摂取量10%位多くなる。

○ 粗纖維摂取量が減少する。特に高能力牛は粗纖維を乾物摂取量の16%以上を超えるのは好ましくない。

○ 養分総量の摂取量を高める。根菜給与で蛋白質摂取量は高まらないが、養分総量(カロリー)が高まる。(濃厚飼料給与に必要な条件)

○ 乳量は増加し、乳組成の改善に役立つ。1日20kg給与で乳量8%増加、脂肪、無脂固形分、蛋白質とも夫々高まる。

○ 放牧草、サイレージ、乾草と併給では1日20kgが適当である。10kgでは飼養効果不明瞭、30kg以上では乳量、脂肪率低下の傾向を示す。

第2表 紫カブの可消化成分

固形分	蛋白質	D C P	T D N	D F Therm el	Ca	P	カロ チン
% 9.2	% 1.3	% 0.9	% 7.1	% 0.14	% 0.02	% 0.02	—

## 紫カブのバラ撒き栽培

放牧地及び採草地は充分な肥培管理を行われないと、草地の維持年数を極度に短くする。草地を更新する際、一度根菜類及びデントコーン等を栽培することにより、石灰・磷酸・堆肥が入り、また、土の團粒構造を作り地力を増進することができる。

そこで、特に紫カブは生育期間が短く(90～120日)、8月以降放牧草が不足しあらじめる時期に紫カブを給与し、乳量の秋落ち現象を喰い止めることが乳量の増産に大きく役立つことになる。その紫カブ利用後に草地の更新を行う方法で最近、各酪農家の間で大変好評をはくしている。

- 1) 播種時期 7月中旬～8月上旬
- 2) 施肥量 (10a当kg) 硫安40, 過石50,

- 硫加 16, 炭カル 100~200, 完熟堆肥 2 t~4 t。
- 3) 除草剤 トレファノサイド 2.5% 粒剤 4 kg (10 a 当) 又はトレファノサイド乳剤 400 g (10 a 当)
- 4) 播種法 ① 堆肥・炭カル散布後, 耕起, 破土, 整地。  
 ② 基肥+除草剤(粒剤の場合) +紫カブ種子 70~80 g (10 a 当) を混和。  
 ③ 上記の②を整地後圃場にムラなく均一に全面散布。  
 ④ 敷設, 播種後ロータリーで浅く (4~5 cm) 攪拌するか, 攪拌なしでローラにて鎮圧, 柴ハローをかけてもよい。(干ばつ時には念入りに行うことが発芽を良くする。)
- 5) 管理, 害虫防除に注意する。発芽期ジノミ・生育全期青虫, ヨトウ虫が発生するので発生したら早期にディプレックス粉剤 10 a 当 3 kg 敷設。
- 6) 収量 (10 a 当) 約 20,000 個体で慣行栽培よりバラ播栽培が 30~50% 増収。
- 7) 収穫期 10 月中旬~下旬。  
 放牧と併用して給与する場合は放牧草量の少なくなった状態を見計らいながら, 9 月中旬頃から給与すると有利である。
- 8) 収穫後の注意



小山に積んだ風景

- ① 収穫後は早く給与する。(貯蔵性が悪い)
- ② 貯蔵する場合は葉部を切り取る。
- ③ 貯蔵温度は低い方が良いが, 0°C 以下になると腐れ易い。
- ④ 貯蔵法は野菜と同じ。

なお, この栽培法は間引きは必要とせず, 個体間で自然淘汰を受け, ある程度減少する。

### 紫カブの利用法

一番省力的かつ効果の上がる給与方法としては, 放牧後期の放牧草の不足時(乾物摂取量が不足する時期の9月中下旬)より紫カブ栽培畑に乳牛を放し, 自由給与する方法である。

まず, 1日1回給与で搾乳牛 30 頭分 2a (約 600 kg 相当) 程度, 即ち 1 頭当たり 20 kg 相当を抜取り, どの牛も自由に採食できるよう放牧頭数より 5~6 カ所多く山積みし, 努めて離して小山を作る。日中暖かい時刻を見計らって自由採食させるが, 約 2~3 時間位で殆ど無駄なく食べる。毎日の抜き取り 2 a 分だけを電牧を移動していくが, この作業は 2 人で 30 分位で終了する。抜き取って運搬し舎内で給与するよりは簡単にでき, 省力的な給与法である。この給与は根年直前まで続けられ, 例年 11 月中は可能である。端境期を切り抜ける方法として効果が大きく, 牛乳生産の秋落ち現象を喰い止める方法として, また草地更新時の前作物として地力増進にも役立ち, 大いに利用価値があるので, 経営規模に合せて計画的に実施してほしい。

第3表 紫丸カブの条播栽培とバラ播き

栽培との収量比較 (kg/10 a)

項目 播種法	個体数	総重	根重	1個体根重	備考
条播	5,300 (100)	5,960 (100)	3,860 (100)	0.73 (100)	畦幅 60 cm 株間 25~30 cm
バラ播	13,300 (251)	8,210 (138)	5,200 (137)	0.40 (55)	

昭 48 : 雪印札幌研究農場調